

容認性判断実験に基づく日本語複数名詞の意味の考察*

野元 裕樹 (東京外国語大学)

nomoto@tufs.ac.jp

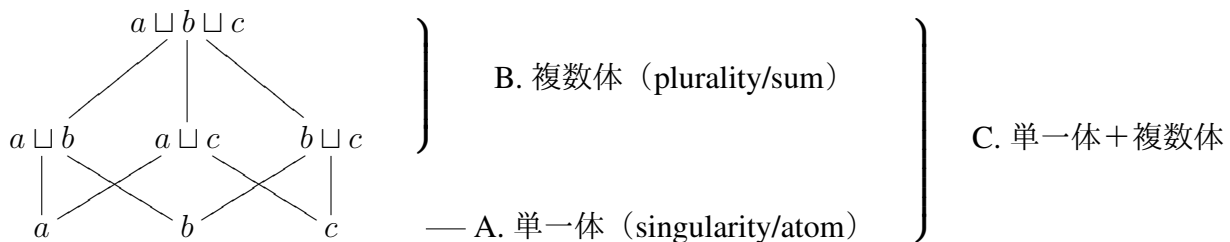
1 はじめに

従来、日本語の複数形名詞 (NP タチなど) は、英語の複数形名詞と異なり、指示対象が複数体 (plurality) のみから成り、単一体 (singularity) を含むことはないと言われてきた (Mizuguchi 2004; Nomoto 2013b など)。これに対し、Kaneko (2013) は、複数形名詞に単一体指示を強いるような文の適格性を問う容認性判断実験に基づき、日本語の複数形名詞も実は単一体を含むと主張した。本稿では、Kaneko の実験の追認実験と、条件を変えた追加実験の結果を報告する。その上で、以下の2点を指摘する。

- (1) a. 5文提示する場合、2文の場合に比べて複数形名詞が指示対象に単一体を含む解釈に対する容認度が上がる。
- b. 実験の結果は複数形名詞の数に関する性質でなく、複数形名詞に付随する (特) 定性を反映する。

2 複数形名詞の指示対象に関する言語間の違い

- (2) 個体領域における数に関する基本概念



英語の複数形名詞は、指示対象に単一体を含むことができる。つまり、(2) の C を外延とし得る。例えば、馬を1頭しか見たことがない場合、(3a) に対する答えは Yes であるし、(3b) の条件節の条件を満たすし、(3c) は偽と判断される。

- (3) a. Have you ever seen horses in this meadow?
- b. If you have ever seen horses in this meadow, you should call us.
- c. Sam has never seen horses in this meadow.

(Farkas and de Swart 2010:3)

*本研究は科研費若手研究 (B) (23720199) の助成を受けている。

一方、日本語の複数形名詞は指示対象に単一体を含むことができないようである。例えば、幼稚園児を一人しか見かけなかった場合、(3)の英文に相当する日本語文(4)に対する判断は、(3)ほど自明ではない。

- (4) a. この辺りで幼稚園児たちを見かけませんでしたか？
b. この辺りで幼稚園児たちを見かけたら、教えてください。
c. 直美はこの辺りで幼稚園児たちを見かけたことはなかった。

このような差に基づき、先行研究では、日本語の複数形名詞は単一体を指示対象に含まず、単一体を指示対象に含む、無標の名詞形と区別されると考えられてきた¹。

それに対し、Kaneko (2013) は第3節で詳述する容認性判断実験の結果に基づき、日本語の複数形名詞も単一体を指示対象に含むことができると主張した。つまり、指示対象の数に関して、日英語の複数形名詞に違いはない、という主張である。

3 Kaneko (2013) の実験とその追認

3.1 原実験

方法 原実験では、岡山大学の学生 25 名が (5)–(7) の太字の文の容認性を「容認可」、「やや不自然」、「非常に不自然」、「容認できない」の 4 段階で判断した²。5 文は 1 枚の質問用紙で同時に提示された。(5)、(6)[B1]、(7)[E1] は複数形名詞が単一体を指示対象に含むことを要求するのに対し、(6)[B2] と (7)[E2] は単一体を含まないことを要求する。

- (5) [状況：AさんとCさんにはそれぞれ二人と三人の子供がいますが、Bさんには一人しか子供がいません]
AもBもCも自分の子供たちを連れてきた。
- (6) [状況：子供が三人いるCさんが友人のBさんに電話をかけています]
C: うちの子供たちがそちらに伺っていますか？
B1: はい、一人来ています。／B2: いいえ、一人しか来ていません。
- (7) [状況：橋下市長に関する情報を収集しているジャーナリストのDが、レストランのオーナーのEに電話をかけています]
D: 橋下市長たちがそちらにいますか？
E1: はい、市長がお一人で来ています。／E2: いいえ、市長お一人しか来ていません。

結果 Kaneko (2013) は、各容認度の人数とその割合を報告している。表1は、容認度を高い方から4、3、2、1と点数化し、結果をまとめたものである。単一体を含まない解釈だけでなく、単一体を含む解釈も平均が3点台である。このことから、Kaneko は日本語の複数形名詞は指示対象に単一体を含み得ると結論した。

¹同様の主張が北京語 (Rullmann and You 2006) やマレー語 (Carson 2000) など複数の類別詞言語についてなされていることから、Nomoto (2013b) はこれを類別詞言語一般について成り立つ特徴であるとし、類別詞言語型として基本数体系の言語類型の中に位置付けた。

²原実験の方法のうち Kaneko (2013) の記述だけからは分からない点に関し、金子真氏からご教示いただいた。

表 1: 原実験の結果

	単一体を含む解釈			単一体を含まない解釈	
	(5)	(6)[B1]	(7)[E1]	(6)[B2]	(7)[E2]
<i>M</i>	3.48	3.24	3.20	3.20	3.52
<i>SD</i>	0.71	0.83	0.82	0.96	0.75

表 2: 追認実験の結果

	単一体を含む解釈						単一体を含まない解釈			
	(5)		(6)[B1]		(7)[E1]		(6)[B1]		(7)[E2]	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
<i>M</i>	3.36	3.32	3.44	3.64	3.08	3.40	2.68	2.56	3.00	2.63
<i>SD</i>	0.64	0.56	0.58	0.57	0.64	0.65	0.75	0.92	0.91	0.92

3.2 追認実験

方法 追認実験は、2つのグループ（A、B）で実施した。東京外国語大学の学生 25 名ずつの計 50 名が参加した。実験の方法は、容認度を表す日本語の表現を若干変更した以外は、原実験と同一である³。

結果 結果は表 2 のようになった。単一体を含む解釈はいずれも平均点 3 点以上で、原実験の結果を再現できた。しかし、単一体を含まない解釈は、追認実験では 3 点以下で、原実験の値を下回り、有意な差があった（(6)[B2]: $F(2, 72) = 3.75, p = .028, \eta_p^2 = .094$; (7)[E2]: $F(2, 72) = 8.40, p = .001, \eta_p^2 = .19$ ）。

4 提示文数を減らした追加実験とそこから分かること

4.1 追加実験

追認実験の結果は、日英語の複数形名詞が指示対象の数という面では違わない、という Kaneko の仮説をより強く支持するよう見える。だが、原実験および追認実験では、同一被験者に 5 つの文が同時に提示された。この場合、容認性判断が他の文に接したことに影響される可能性がある。それを調べるため、追加の実験を行った。

方法 追認実験とは異なる 75 名（25 名 × 3 グループ）を被験者とし、提示する文を 5 文から 2 文に減らした⁴。その他の条件は追認実験と同一である。

³以下のように、Kaneko (2013) で用いられている英語の表現とそれに相当する日本語訳を併記した：「自然である (OK)」、「少し不自然である (a little strange)」、「非常に不自然である (very strange)」、「容認不可能である (unacceptable)」。

⁴各グループに与えられた文は、以下の通りである。C: (5), (7)[E1]; D: (6)[B2], (7)[E2]; E: (6)[B1], (5)に「それぞれ」を加えた文、すなわち「A も B も C もそれぞれ自分の子供たちを連れてきた」。「それぞれ」の有無により容認度に有意な差は出なかった ($t(48) = .57, p = .57, d = .16$)。

表 3: 追加実験の結果

	単一体を含む解釈			単一体を含まない解釈	
	(5)	(6)[B1]	(7)[E1]	(6)[B2]	(7)[E2]
<i>M</i>	2.92	3.04	2.40	2.56	2.40
<i>SD</i>	0.76	0.73	0.76	0.58	0.87

結果 結果は表3のようになった。追認実験の結果との比較により、5文提示された場合、2文の場合に比べて単一体を含む解釈に対する容認度が上がることが分かった ((5): $t(73) = 2.63, p = .010, d = .62$; (6)[B1]: $t(73) = 3.22, p = .002, d = .76$; (7)[E1]: $t(73) = 4.94, p < .001, d = 1.18$)。単一体を含まない解釈の容認度には有意差が出なかった ((6)[B2]: $t(73) = 0.32, p = .75, d = .084$; (7)[E2]: $t(73) = 1.97, p = .052, d = .49$)。2つの解釈で有意差の有無に違いが出るのは、5文を提示した追認実験では、複数の文が同時に提示されると本来は存在しないはずのコントラストが生じる、という一般的傾向 (Myers 2009) が現れたためと考えられる。複数形名詞の意味をより正確に捉えるには、他の文の影響が少ない、追加実験の方が適していると言える。

4.2 追加実験の結果の検討：数でなく（特）定性

追加実験では、すべての場合で、原実験に比べて容認度が下がった。最も高い(6)[B1]でも3.04である。(6)[B1]は(6)[B2]より容認度が高い ($t(48) = 2.56, p = .014, d = .72$)。しかし、(5)や(6)[B1]程度の値をもって、複数形名詞が単一体を含むと断言してよいかは疑問である。また、同じ「はい」による答えでも(7)[E1]は、「いいえ」による答えの(7)[E2]の間に差がない。よって、この実験が複数形名詞の数に関わる性質を捉えているとは考えにくい。

実験結果は、日本語複数形名詞に付随する（特）定性の性質 (Kurafuji 2004; Nakanishi and Tomioka 2004; Hosoi 2005) に着目すると、理解できる。

4.2.1 日本語複数形名詞の（特）定性に関わる性質

(8) 関係所有構文の内項になれない⁵

- a. 井上さんには子供がある／いる。[井上さんの母親という役割を述べる文として]
- b. *?井上さんには子供たちがある／いる。[子供たちの存在を述べる文としては ok]

(Nakanishi and Tomioka 2004:116)

(9) 述語になれない

- a. 彼らは学生だ。[主語の属性を表す文として]
- b. *彼らは学生たちだ。[2つの個体（複数体）の同一性を述べる文としては ok]

(10) 総称文と相容れない

- a. イタリア人は陽気だ。[イタリア人の一般的特徴を述べる文として]
- b. ???イタリア人たちは陽気だ。[文脈上特定されるイタリア人集団の特徴を述べる文としては ok]

(Nakanishi and Tomioka 2004:114)

⁵(8)–(11)の言語事実は、日本語だけでなく北京語やマレー語など複数の言語の複数形名詞に観察される。詳細は、Nomoto (2013a) を参照されたい。

(11) 内包動詞に対して常に広い作用域を取る

- a. その病院は看護婦をさがしています。[求人（さがす > 看護婦）の解釈で]
- b. *?その病院は看護婦たちをさがしています。[文脈上特定される看護婦集団の搜索の解釈（看護婦たち > さがす）では ok] (Nakanishi and Tomioka 2004:115)

(12) のような例も可能なので、複数形名詞が常に定 (definite) であるとは言えない。

(12) 公園に子供たちがいた。 (Nakanishi and Tomioka 2004:120)

ここでは、複数形名詞は定と特定 (specific) のいずれにもなるものの、デフォルトでは定である、という Nomoto (2013a) の分析を採用する⁶。

一般に、定の名詞句は、話し手・聞き手の双方が関与する文脈で指示対象が一意に定まる。当該の文脈において、ある名詞句の外延が (2) の図全体 (C) である場合、その名詞句が定である場合の外延は、最大要素 (上限) $a \sqcup b \sqcup c$ となる。ここで重要なのは、仮にその名詞句の外延が複数体のみ (B) だとしても、定である場合の外延はやはり $a \sqcup b \sqcup c$ であるという点である。つまり、今解明しようとしている複数形名詞の数に関する性質、具体的には指示対象に単一体が含まれるかどうかは、定性によって覆い隠されてしまう。

4.2.2 追加実験の結果の定性による説明

追加実験の結果は、以下のように、定性により説明できる。

(6)[B1] の容認度が (6)[B2] に対して高い

- (6) C: うちの子供たちがそちらに伺っていますか？
→ 子供たちは、デフォルトの定の解釈を受ける。つまり、「Cの子供三人全員」と理解される。
- B1: はい、一人来ています。
→ 「一人来ている」は「三人来ている」の部分集合なので、子供たちがデフォルトで持つ定の意味と矛盾しない。「(ちようど一人)」の解釈は語用論的に生じる。
- B2: いいえ、一人しか来ていません。
→ 一人しかのしかにより、「三人来ている」が偽となる。よって、子供たちがデフォルトで持つ定の意味と矛盾が生じる。
- cf. いいえ、一人も来ていません。(定の意味が維持される「いいえ」の答え: $x = C$ の子供三人全員 $\wedge x$ が来ていない)

(7) の容認度が2文とも低い

- (7) D: 橋下市長たちがそちらにいますか？
E1: はい、市長がお一人で来ています。 / E2: いいえ、市長お一人しか来ていません。
→ お一人でも一人しかも「2人以上来ている」を偽にする。よって、橋下市長たちがデフォルトで持つ定の意味、「橋下市長を含む集団のメンバー全員」と矛盾を来す。

⁶(12) のような例をきちんと扱うためには、特定性の定義は「話し手のみが指示対象を特定できる」程度では不十分であり、さらなる理論的議論が必要である。しかし、ここでの議論には影響しないので、割愛する。

5 まとめと今後の課題

本稿では、日本語の複数形名詞が単一体を指示対象に含むかどうかを調べるために Kaneko (2013) が行った容認性判断実験の追認実験、追加実験の結果を報告した。Kaneko は、原実験で単一体を含む解釈が含まない解釈と同程度に容認されたことから、日本語の複数形名詞も英語の複数形名詞と同じく、単一体を指示対象に含むと主張した。しかし、追認実験と追加実験の結果の比較は、原実験では単一体を含む解釈の容認度が5文を同時に提示するという実験手法が原因で引き上がった可能性を示唆する。また、その可能性が軽減された、追加実験の結果は、名詞句の数に関する性質ではなく、(特) 定性によって説明できることを示した。従って、一連の容認性判断実験は、複数形名詞の指示対象の数に関する Kaneko の主張とは無関係である。

4.2 節で、定の複数形名詞では、指示対象に単一体を含むかどうかは原理的に判別不可能になることを指摘した。定・不定の区別を冠詞によって行う英語タイプの言語では、無冠詞の文で複数形名詞が不定の解釈を受けるため、数に関する性質を(3)のような文により容易に調べられる。しかし、日本語タイプの言語では、複数標識のみで定の解釈が生じてしまうため、同じ方法を用いることができない。(3)に相当する日本語文(4)の判断が(3)ほど自明でないのは、結局、複数形名詞の数に関する性質の日英語間の違いによるものとは言い切れない。

残念ながら、現段階では日本語の複数形名詞が単一体を指示対象に含むかどうかは、複数形名詞自体の言語事実からは不明であり、他の名詞形を考慮に入れての推測によらざるを得ない。日本語タイプの言語全体に有効な、客観的な調査方法を見出すことが、今後の重要な課題である。

参考文献

- Carson, J. Cécile. 2000. The semantics of number in Malay noun phrases. カルガリー大学修士論文.
- Farkas, Donka F., and Henriëtte E. de Swart. 2010. The semantics and pragmatics of plurals. *Semantics and Pragmatics* 3:1–54.
- Hosoi, Hironobu. 2005. Japanese *-tachi* plurals. In *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, vol. 31, 157–168.
- Kaneko, Makoto. 2013. Plural markers denoting salient and eventually intensional members in Japanese. Workshop Languages with and without Articles での発表論文.
- Kurafuji, Takeo. 2004. Plural morphemes, definiteness, and the notion of semantic parameter. *Language and Linguistics* 5:211–242.
- Mizuguchi, Shinobu. 2004. *Individuation in Numeral Classifier Languages: A Case of Japanese Classifiers and Plurals*. Tokyo: Shohakusha.
- Myers, James. 2009. Syntactic judgment experiments. *Language and Linguistics Companion* 3:406–423.
- Nakanishi, Kimiko, and Satoshi Tomioka. 2004. Japanese plurals are exceptional. *Journal of East Asian Linguistics* 13:113–140.
- Nomoto, Hiroki. 2013a. Definite-like plurals. 草稿. 東京外国語大学.
- Nomoto, Hiroki. 2013b. Number in Classifier Languages. ミネソタ大学博士論文.
- Rullmann, Hotze, and Aili You. 2006. General number and the semantics and pragmatics of indefinite bare nouns in Mandarin Chinese. In *Where Semantics Meets Pragmatics*, ed. Klaus von Stechow and Ken Turner, 175–196. Amsterdam: Elsevier.